

2026 年度

文学部 総合型選抜 I 期

(文章読解型)

【小論文】

60 分 100 点

次の文章を読んで、設問に答えなさい。(100点)

持ち歩けるデバイスを使って、ここではないどこかで別の情報を得たり、別のコミュニケーションに参加したりすることが可能になった状況を、タートル<sup>1</sup>は「常時接続の世界」と呼びました。スマホ時代の哲学のキーワードは、「常時接続」です。

(中略)

常時接続の世界で失われたもの。いろいろな論者の見解を私なりに整理して総合するなら、それは二つの観点から説明できます。それは、「孤立」と「孤独」です。それぞれについて言い換えれば、他者から切り離されて何かに集中している状態と、自分自身と対話している状態のことです。

常時接続の世界の行動について立ち止まって考えればわかることですが、私たちは、反射的なコミュニケーションを積み重ねています。いろいろなものを保留しながら、短いテキストやアクションで表面的な返答を順次していく。

例えば、こんな光景はありふれたものでしょう。対面で誰かと話しているときに、スタンプと短いテキストで4人にLINEを返し、フリマアプリからのお知らせをスルーして、早送り機能でソシヤゲ<sup>2</sup>のストーリーを進め、X (旧Twitter) でいくつかの記事を熟読せずにリポストし、Instagramで気に入ったインフルエンサーの薦める服を保存しておく。

ここで失われているのが「孤立」です。何か一つのことに取り組み、それに集中するにはあまりに気が散っていて、いろいろなコミュニケーションや感覚刺激の多様性が、一つのこと没頭することを妨げてしまっています。

(中略)

常時接続の世界では、「孤立」だけでなく「孤独」もまた失われつつあるという話でした。「孤立」は、注意を分散させず、一つのこと集中する力に関係するのに対して、「孤独」は、自分自身と対話する力に関わっています。やはりタートルが、印象深い事例を挙げているので、これを手がかりにしましょう。

先日、仲がよかった友人の追悼式に出席したとき、プログラムが書かれたクリーム色のカードが用意されていた。そこには弔辞を述べる人の名前、音楽を演奏する人の名前や曲名、そして若く美しかったころの友人の写真が載っていた。私のまわりの何人かは、そのプログラムで携帯電話を隠し、式のあいだにテキストを送っていた。

その中の1人、60代後半とおぼしき女性が、式のあと私のそばに来て、当たり前のような口調で「あんな長い時間、電話なしで座っているなんて無理ね」と言った。式の目的は、時間をとってその人に思いをはせることではないのか。この女性は、手にして10年にも満たないテクノロジーのせいで、それができなくなっているのだ。

これが〈孤独〉を欠いた状態の一例です。心当たりのある人もいるでしょうか。

(中略)

退屈に耐えきれず、何か刺激やコミュニケーションを求めてしまう。自分自身と過ごすことができないということです。〈孤独〉という言葉を通して、刺激を求めたり他者への反応を優先したりすることなく、自分一人で時間を過ごすことの重要性が語られているわけですね。

(中略)

どうして〈孤独〉が必要なのかという問いに、ハンナ・アーレント<sup>3</sup>という哲学者の想像力を借りて迫ってみたいと思います。アーレントは、「一人であること」を三つの様式に分けています。それが、〈孤立 (isolation)〉〈孤独 (solitude)〉〈寂しさ (loneliness)〉です。この補助線を引けば、多少見通しがよくなり、〈孤独〉と〈孤立〉の関係も見えてきます。順に見ていきましょう。

アーレントは、他の人とのつながりが断たれた状態を〈孤立〉と呼びました。言い換えると、〈孤立〉は、何らかのことを成し遂げるために必要な、誰にも邪魔されずにいる状態を指しています。創造的なことでなくても、何かに集中して取り組むためには誰かが介在してはなりません。例えば「何かを学んだり、一冊の書物を読んだりする」ときなどに、「他の人の存在から守られていることが必要になる」ように。

(中略)

それに対して〈孤独〉は「沈黙の内に自らとともにあるという存在のあり方」だと説明されます。ちょっとおしゃれな言い方でニュアンスを酌みにくいと思いますが、〈孤独〉にあるときの私たちは、心静かに自分自身と対話するように「思考」しているということです。アーレントは、私が自分自身と過ごしながら、「自分に起こるすべてのことについて、自らと対話する」という「思考」を実現するものだと表現しています。

(中略)

より興味深いのは、「一人であること」の三様式の残りの一つである〈寂しき〉です。アーレントは、〈孤独〉と〈寂しき〉を区別するとき、〈孤独〉が〈孤立〉（＝一人であること）を必要とするのに対して、〈寂しき〉は、「他の人々と一緒にいるときに最もはつきりあらわれてくる」と述べています。

〈寂しき〉は、いろいろな人に囲まれているはずなのに、自分はたった一人だと感じていて、そんな自分を抱えきれずに他者を依存的に求めてしまう状態です。どうにも不安で、仕事が虚しくて、友人や家族とうまくいかないのが苦しくて、誰にも理解されない感覚があつて、退屈を抱えきれなくて他者や刺激を求めてしまう。たいていの人が、これに心当たりがあると思います。

（中略）

スマホという新しいメディアは、〈寂しき〉からくる「つながりたい」「退屈を埋めたい」などというニーズにうまく応答してくれます。スマホは、いつでもどこでも使えるだけでなく、スマホを含む様々な情報技術が、私たちのタスクを複数化し、並行処理を可能にしています。コミュニケーションも娯楽もその他の刺激も流し込み、自己対話を止めて感覚刺激の渦に巻き込んでくれるマルチタスキングは、つながりへの欲望も、退屈や不安も覆い隠してくれます。

しかし、〈寂しき〉からくるマルチタスキングは、いろいろな刺激の断片を矢継ぎ早に与えるものなので、一つ一つのタスクへの没頭がありません。そうすると、ふとした瞬間に立ち止まったとき、「あれは何だったんだ」と虚しくなったり、つながりの希薄さ（つながっていても一人ぼっち）を実感したりすることになります。

常時接続が可能になったスマホ時代において、〈孤立〉は腐食し、それゆえに〈孤独〉も奪われる一方で、〈寂しき〉が加速してしまうにもかかわらず、私たちはそうした存在の仕方の危うさに気づいていないように思えます。

（谷川嘉浩『スマホ時代の哲学』による）

（注）

- 1 タークル シェリー・タークル（一九四八） マサチューセッツ工科大学の心理学者。コンピューターやロボットなどのテクノロジと人間との関係を研究している。
- 2 ソシヤゲ ソーシャル・ネットワーク・ゲームの略。インターネット上で複数のプレイヤーと遊ぶことができるオンラインゲームの一種。

3 ハンナ・アーレント（一九〇六―一九七五） ユダヤ系ドイツ人の哲学者・思想家。ナチス台頭後にアメリカに亡命し研究

活動を行った。全体主義を分析したことで知られる。

問一 「常時接続の世界」について、筆者が述べていることを三〇〇字以内で要約しなさい。

問二 「常時接続の世界」が私たちにもたらす影響には、どのようなことが考えられるか。あなたの考えを五〇〇字以内で述べな  
さい。